

新たな研究センターの立ち上がりと2024年7月豪雨による被災

流域保全部門長 菊池 俊一

当大学では全学の教育研究支援組織として、2024年4月1日付で「山形大学農山村リジェネレーション共創研究センター」を鶴岡キャンパスに設置しました。本センターの設置目的は、新たな視点からの土地利用・活用方法を検討し、森林資源の最大活用や野生動物管理の革新による農山村の再生を目指し、上名川演習林を舞台・材料として研究教育活動を進めることとなっています。農学部の教員を中心に5学部19名の教員で構成され、鶴岡市や民間研究組織との連携協力により研究成果の社会実装を目指すとされています。

当センターは①野生動物、②安全・健康、③森林資源管理、④生活・経済といった4つの研究部門により組織されています。①野生動物研究部門は、森林、農地、宅地の変化による影響を調べるために野生動物の生態を考慮した生息地予測、人間との関わりの中での加害性予測、マダニ感染症の媒介に関する調査を行い、合わせて効率化・低コスト化を可能とする野生動物モニタリング調査の新たな技術開発を行うことを目標としています。②安全・健康研究部門は、野生動物由来の感染症のリスク評価研究を行うため、野生動物の生息地の変化がマダニ類の保有する病原体や薬剤耐性菌による汚染にどのような影響をおよぼすかを調べるとしています。さらに地域社会ニーズに応えるため斜面崩壊(土砂崩れ)のリスク評価研究も行うとしています。③森林資源管理研究部門は、スギ人工林だけでなく多様な広葉樹林の森林バイオマス推定手法とその脱炭素機能(カーボンクレジット)の定量手法の開発を行うとともに、森林が有する生物多様性保全、土砂災害防止などの機能を総合的に評価する方法を開発するとしています。④生活・経済研究部門は、新しいコモズの提案とそれに関する合意形成の研究を行うとし、集落の再編の成功条件や外部人材および先端技術が果たす役割を評価しつつ、統合的アプローチを用いた新たな地域資源利用・管理のあり方を提示するとしています。このセンターに上名川演習林も一員として参画し、その目標達成に向けて研究教育活動の支援を進めていきたいと思いをします。

その一方で、本年7月の豪雨により山形県や秋田県では大きな災害が発生し、演習林内でも林道全線において路面洗掘や法面崩落が多数発生しました。昨年に発生が確認された地すべり性崩壊により流出し河床に堆積していた土砂が今回の豪雨により再移動したことから河道が変わり、基幹道路に土砂流出する事態も生じました。この甚大な被害に対し職員総出で復旧作業を続けています。しかし、予算と人員は極めて限られているため、文科省災害復旧予算の獲得・執行に向けて動いています。ただ、毎年のように発生する大きな災害により演習林が組織として大いに疲弊していることは隠せない現実であると思いをします。

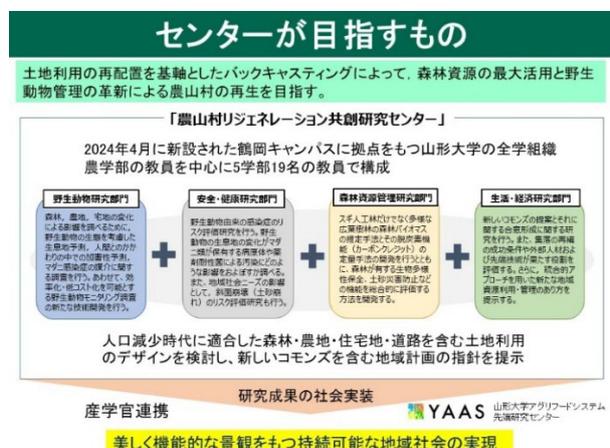


図 山形大学農山村リジェネレーション共創研究センターの目指すもの(2024年8月28日開催の当センターキックオフイベント説明資料より)



写真 河道が変わり河床堆積土砂が道路などに流出(2024年7月豪雨後に撮影)